

有壬記念学術奨励賞

基礎医学分野受賞

今村 勝氏(DH09)

この度、第十九回有壬記念学術奨励賞に選出いただき大変光栄である。私は平成九年に本学を卒業後、本学小児科に入局し、平成十六年に小児科博士課程に進学した。本学第二病理で局所での炎症マーカーとされるペントラキシン3の単球由来マクロファージ及び好中球における役割について研究を行った。本学小児科に帰室後、平成二十三年に国立シンガポール大学のProf. Dario Campana ラボへ留学した。膜結合型インターロイキン(IL-15)遺伝子導入ナチュラルキラー(NK)細胞を用いて新規細胞療法を開発を行った。NK細胞が腫瘍細胞に対する数的優位を長時間維持させるためにはIL-2が必須であるが、臨床的にはIL-2の副作用が問題であった。本細胞はIL-2の非存在下でも自律性増殖を示し、優れた抗腫瘍効果を示した(Blood, 2014;124:1081-8)。平成二十六年に帰国後は本学小児科血液腫瘍グループにて診療及び研究を続けている。今後も更なる細胞療法の新規開発に向けて、今回の受賞を励みに研究を継続したい。最後に研究及び留学の機会を与えて頂いた本学小児科の諸先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



ラボディナーにて
中央がProf. Dario Campana夫妻です。左から4番目が私です。

臨床医学分野受賞

上村 顕也氏(DH11)

この度、第十九回有壬記念学術奨励賞の受賞者に選出いただき大変光栄で、感謝の思いをこめ、学士会の諸先生方に挨拶申し上げます。私は平成十一年に本学を卒業、平成十三年に旧第三内科教室(青柳豊名誉教授・現消化器内科科学教室)に入局し、消化器内科課程に専攻した。平成十五年からは本学博士課程に進学し、第一生化学教室(木南俊名誉教授)のもとで、癌に関連する遺伝子の機能解析をテーマとして研究を行った(Oncogene 2007)。この時期の経験が私の基礎研究に対するモチベーションに大きく関わっている。博士課程修了後は、青柳教授のご高配で遺伝子治療研究のテーマで米国、ピッツバーグ大学(Dexi Jie教授)に留学した。物理的な方法で遺伝子を生体細胞に導入するハイドロダイナミクスは、簡便かつ効率的な遺伝子導入法として、実験手法として利用されている。私は、ピッツバーグの地で、前任者の須田剛士先生(現、魚沼基幹病院副院長)から、研究の引継ぎを受けた後に約一年半、留学した。留学期間を通じて、私は血管内カテーテル技術とハイドロダイナミクス法を組み合わせたことで、肝臓の区域特異的に注入量を大幅に減じた、Image-guided Hydrodynamic Gene Delivery法を確立し、ブタ、イヌそして非ヒト霊長類を対象とした遺伝子導入実験に成功した(Mol Ther 2009, Mol Ther 2010)。帰国後は、ピッツバーグ大学などと国際共同研究を継続するうちに、これまでの成果を「Made in Niigata」の遺伝子導入システムを、本学産学連携推進機構の仲介をえて新潟市の産業振興財団の6企業と共同で開発し、成果を報告した(Gene Ther 2013, Mol Ther Nucleic Acid 2013, PLoSOne 2014)。現在、様々な臨床応用に向けた検証を行っている。

本年、消化器内科は肝硬変に対する自己骨髄細胞の投与療法を開発した寺井崇二先生を当教室の第四代教授としてお迎えした。トランスレーショナル研究のエキスパートから方法論を勉強させていただく機会を得たことは、これまでの遺伝子治療の基礎研究を臨床応用する上で非常に好機と考えている。今回の受賞を励みに、より一層精進し、基礎研究成果を患者さんに還元するというアウトカムを目標として、遺伝子治療のトランスレーショナル研究を行ない、新潟発の新規治療法を世界へ発信したい。

最後にこれまでにご指導いただいた消化器内科、第一生化学教室、ピッツバーグ大学の皆様に厚く御礼申し上げます。



ピッツバーグでお世話になった、動物の看護師、イヌと。

臨床医学分野受賞

土屋 淳紀氏(DH11)

この度、第十九回有壬記念学術奨励賞に選出いただき大変光栄である。私は平成十一年に本学を卒業、平成十三年に第三内科に入局し、平成十四年に本学博士課程に進学した。大学院では国内留学し京都大学医学部小児科(中畑龍俊教授・現京都大学IPS細胞研究所CIRA副所長)で、マウス肝幹前駆細胞の長期増殖継代法の開発及びその階層性の解析を行った(Gastroenterology 2005, Stem Cells 2007)。平成十九年帰国後、大学病院にて臨床研究活動に入り、ヒト慢性、急性肝疾患での肝幹細胞動態を多数解析し(Hepatology Research 2009)、肝細胞癌に肝幹細胞マーカーNCAM陽性肝細胞癌が存在し予後が悪いことを初めて報告し(Cancer Letters 2011)、肝幹前駆細胞 niche で高発現するSDF-1の解析も京都大学再生医学研究所生体システム制御学分野・長澤亘司教授との共同研究で行った(Dig Dis Sci. 2012)。平成二十三年から二十五年まで英国Edinburgh University Scottish Centre of Regenerative MedicineのStuart J Forbes教授のもと研究を行い、ドイツHannover大学Rita Gerards-Schahn教授とも共同研究し、肝幹前駆細胞 niche でNCAMが反接着性に関わり再生効率に寄与する新規役割を解明した(Hepatology 2014)。再帰局後は、幹細胞の知識を応用し、肝臓で分子標的薬の治療前予測が行えた症例を経験するなど(Gastroenterology 2014)寺井教授のもと消化器内科・線維化・再生解析チームのチーフとして臨床、研究、教育に携わっている。今後これまでの経験を生かし、新潟で消化器領域のみならず再生医療の発展に寄与したい。



Forbes Labメンバーとともに研究所前にて撮影。
前列一番左が筆者。後列左から4番目がStuart J Forbes教授。

支部だより

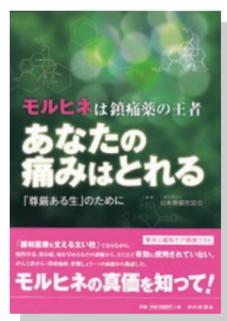
「沖縄支部」

沖縄支部の支部長は内間荘六先生であり、昨年度は残念なことに会員の都合が合わず支部総会を行っていない。平成二十七年年度の会員は名簿上五十八名であり、昨年度で渡部久美教授(分子生命科学研究施設)が定年退職し、新潟大学ミヤマー研究拠点に就職したため、琉球大学教授(名簿順)は金谷文則(整形外科)、西巻正(消化器・腫瘍外科学)、澤口昭一(眼科)、青木陽一(女性・生殖医学)、松崎吾朗(分子生命科学研究施設)の五名である。新潟大学同門からは琉球大学医学部長を初代の故大鶴正満、茨木邦夫、佐藤良也と三名輩出している。

支部総会が多いときは二十名を超える参加者があるが、ここ数年新規入会者がおらず寂しい限りである。今年度こそは新人を加えて盛大に支部総会を行いたいと考えている。
平成二十七年四月
(理事 金谷文則・D53)

新刊図書案内

- 題名 モルヒネは鎮痛薬の王者
あなたの痛みはとれる
「首藤ある生」のために
- 編者 筆者 加藤 佳子(D45) 他
- 発行所 中日新聞社



- 題名 エッセイ集
風邪は腕から
- 著者 品田 章(D39)
- 発行所 出版サポート大樹舎



一枚の写真から

諸事情により学生、医局の時代の写真はこのくらいしかない。写真に日付が入るなんていう機能は全く考えられない時代の写真なので、正確な日付はわからないが、おそらく学部一年ころではないだろうか？写真に写っているのは左から、その頃から付き合っていた私の妻、同級生の鈴木幸雄君、私、成田一衛君、一年先輩の土屋現成田)美和子さん。このころから



本当にドライブが大好きで、このメンバーや他に数人ドライブ好きの仲間がいて、休日になるとドライブに出かけていたのを思い出す。一度は、サンオールスタースのコンサートに行った勢いでそのまま秋田に出かけ、三泊四日の東北一周旅行をしたことがある。やっぱりまだいぶあり、事故があったから今では笑って話せるが、数人で行った私の実家の松本からの帰り道、大和田信雄君が一人遅れを取ってしまった、追いつくためにだいたい無茶な追い越しをし、国道二六号の対向二車線で車三台が並走したなんて事もあった。

こんな風に過ごした学生生活だか、車に乗る楽しみは今でも全く変わりなく、暇さえあれば車に乗り込み、時間の許す限り乗り回してやるのが好きである。
(柳澤善計・D58)

編集後記

編集委員

- 佐藤 昇(PI01) 藤井雅寛(F57)
- 田中正明(D55) 矢尾板永信(D56)
- 成田美和子(D57) 長谷川隆志(D60)
- 小山 論(F63) 川島寛之(DH08)

学生編集委員

- 五年生 吉田 栗・後藤優佳・島野利乃
- 四年生 和田恵実・渡辺文乃・染谷拓郎
- 三年生 松岡崇史・鈴木渉・田中萌恵

●有壬だより

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757
新潟大学医学部学士会
有壬だより編集部
TEL (025) 227-2037 (直通)
FAX (025) 227-0751
e-mail address yujin@med.niigata-u.ac.jp
学士会ホームページ
http://www.med.niigata-u.ac.jp/yujin/
印刷:(株)博進堂 TEL(025) 271-2675